

写真家・奈良原一高の物語

蔦谷典子（島根県立美術館主任学芸員）



奈良原一高 山中湖にて 1999年1月 © Keiko Narahara

奈良原一高 年譜

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 1931年 | 11月3日、福岡県大牟田市に生まれる。本名・ <small>ならはらかずたか</small> 檜原一高。 | 1970年 | 写真集『ジャパネスク』（毎日新聞社）刊行。
渡米しニューヨークを中心に4年間滞在（1970年4月～1974年4月）。 |
| 1934年 | 3歳から6歳までを長崎で過ごす。 | 1971年 | 写真集『王国』（『映像の現代』第1巻、中央公論社）刊行。 |
| 1939年 | 父の転勤に伴い名古屋市に移る。以後、転校が続く。 | 1973年 | 個展「IKKO NARAHARA」ジョージ・イーストマンハウス
国際写真美術館ほか。 |
| 1945年 | 終戦。 | 1974年 | 「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィ」展
（ニューヨーク近代美術館）出品。
日本へ帰国。 |
| 1950年 | 松江高校卒業、中央大学法学部入学。
奈良の飛鳥園主・小川晴暘の指示で仏像を見て周り造型に
開眼。法律から美術史へと転向する決意を固める。 | 1975年 | 写真集『消滅した時間』（朝日新聞社）を刊行。 |
| 1954年 | 早稲田大学大学院芸術学専攻（美術史）修士課程に進む。
廃墟の連作《無国籍地》を制作する。
前衛芸術に対する関心が急激に高まり、多くの生涯の友に
出会う。 | 1978年 | 写真集『王国』（朝日ソノラマ）を刊行。 |
| 1955年 | 「グループ“実在者”」、「制作者懇談会」に参加。 | 1981年 | 写真集『光の回廊—サン・マルコ』（ウナック・トウキョウ）を刊行。 |
| 1956年 | 初個展「奈良原一高写真展 人間の土地」開催。 | 1985年 | 写真集『ヴェネツィアの夜』（岩波書店）刊行。
日本写真協会年度賞受賞。 |
| 1957年 | 福島辰夫の提唱で第1回「10人の眼」展開催。 | 1987年 | 写真集『ヴェネツィアの光』（流行通信）刊行。ヴェネツィア3部作
が完結。 |
| 1958年 | 個展「王国」開催。第2回日本写真批評家協会新人賞受賞。 | 1994年 | 写真集『空 Kū-Emptiness』（リプロポート）刊行。 |
| 1959年 | 「VIVO」が結成される。
第一生命カレンダーで文部大臣賞受賞。翌年通産大臣賞。
デザイン・杉浦康平 | 1996年 | 紫綬褒章、受章。 |
| 1962年 | 渡欧して、パリを中心に3年間滞在。（1962年8月～1965年5月） | 2002年 | 初の回顧展「Ikko Narahara」（ヨーロッパ写真美術館、パリ）。
写真集『HEAVEN 天』（クレオ）刊行。 |
| 1965年 | 日本へ帰国（1965年5月～1970年4月）。
富士紡カレンダーで文部大臣賞、67年には通産大臣賞受賞。
デザイン・勝井三雄、衣装・森英恵 | 2004年 | 回顧展「奈良原一高展 時空の鏡—シンクロシティ」（東京都写真美術館）。
写真集『円—Circular Vision』（クレオ）刊行。 |
| 1967年 | 写真集『ヨーロッパ—静止した時間』（鹿島研究所出版会）を
刊行。日本写真批評家協会作家賞受賞。翌年、芸術選奨文
部大臣賞、毎日芸術賞を受賞。 | 2006年 | 旭日小綬章、受章。 |
| 1969年 | 写真集『スペイン—偉大なる午後』（求龍堂）刊行。 | 2010年 | 回顧展「手のなかの空—奈良原一高1954-2004」（島根県立美術館、2012年長崎県美術館） |
| | | 2020年 | 1月19日逝去。享年88歳。 |

発行：島根県立美術館 2022年9月2日
島根県立美術館 © 2022

掲載作品は奈良原一高作 © Ikko Narahara Archeves
表紙：奈良原の登場する映画「VALIENTE」のポスターの前で © Keiko Narahara

※この冊子は「ふるさと島根寄附金事業」によって作成されています。



〒690-0049 島根県松江市袖師町1-5
TEL:0852-55-4700 FAX:0852-55-4714
<https://www.shimane-art-museum.jp>

1 祝祭と戦争 少年期

写真家・奈良原一高（1931.2.20 - 2020）は、1956年の初個展「人間の土地」で戦後写真史を塗り替える鮮烈なデビューを飾った。60年代にはヨーロッパへ、70年代にはアメリカへと渡り、人間が創り上げた文明の光景を巨視的に捉える壮麗な写真群を生み出している。そこには、人間の営みを慈しみをもってみつめる至純な眼差しが特徴にあった。周到に練り上げられたコンセプトによって構築されたその清涼な世界は、多くの人々を魅了してやまない。戦後日本の写真を牽引し、国際的にも高い評価を受けた希有な写真家である。



小学校入学 大牟田・母の実家の庭で。

奈良原一高、本名・ならはらかずたか檜原一高の幼年期の記憶は、3歳から6歳を過ごした長崎の街にはじまる。西洋・中国・日本の文化が融合し、色彩豊かで躍動感溢れる祭りが繰り広げられる長崎。阿茶さんのお盆、蛇踊り、ペーロン競争「ハタ」と呼ばれる色鮮やかな凧、海の輝き。この夢の町で祝祭の日々を過ごしたことは、後年までも奈良原の感覚のなかに息づいていた。

ある日のこと、長崎港に停泊する外国航路の船すべてが封鎖された。その原因となったのが幼い一高である。飴屋の店先で機織りのように飴を打つ機械に魅了され、終日時を忘れて見入っていて日も暮れ夜になった。当時、子供を誘拐して海外で売り飛ばす事件が発生しており、検事を勤める父・檜原義男は、一人息子の安否を気遣い長崎港を封鎖したのだ。父の権勢と一高の並外れた集中力を物語る。

父の転勤で名古屋に移ると、一変して色彩のない戦時下の世界へと変わる。奈良原が愛知一中に入学したのは、軍部の圧力によって全員が海軍飛行予科練に志



小学校5・6年頃 名古屋で両親と。

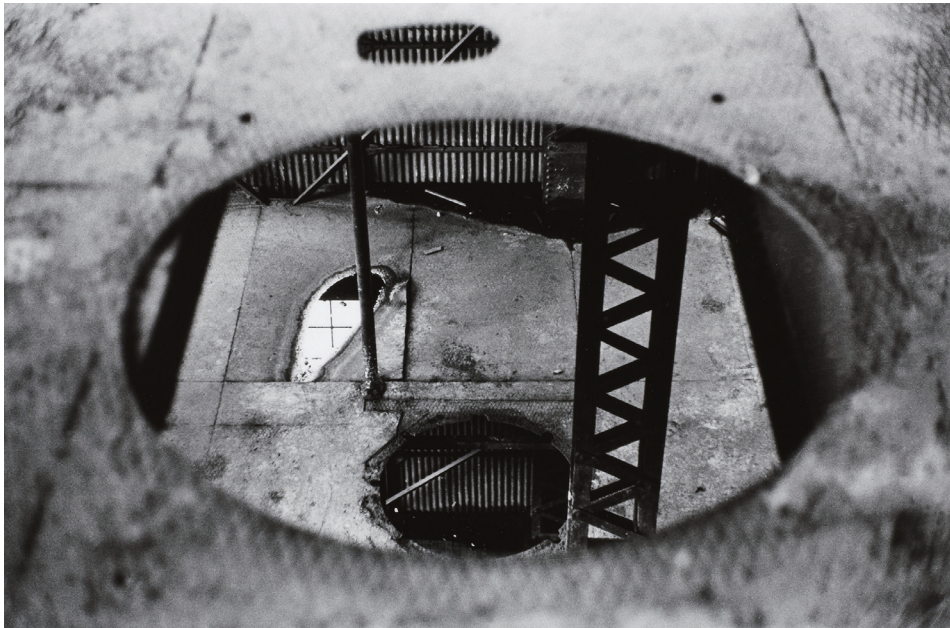
願するという「愛知一中予科練総決起事件」が起きた翌年だった。まもなく、学徒動員によって軍需工場で航空機製造に携わった。爆撃によって多くの友人を失い、空襲警報で防空壕へ逃げる日々が続く中、終戦間際には扇状攻撃に見舞われ、眼前に焼夷弾が突き刺さるのを眼にしなが、必死で郊外に走り逃げて生き延びた。振り向くと街全体が炎につつまれて火炎の柱が立ちのぼる地獄のような光景が広がっていた。そして、1945年8月、終戦を迎える。奈良原は13歳だった。多くの死に直面し、戦後の食糧難に苦しめられ、一家は日本海側に移住した。松江での暮らしが始まると、終戦後まもなくにも関わらず、音楽会が開かれるという文化の香りのする生活に奈良原は癒やされていく。松江高校では、芸術好き仲間が集まり、画文集『しろたま』を発行し、文化祭には初めて四ツ切に引伸した写真を発表した。その頃、境港在住の写真家・植田正治が活躍しており、代表作《パパとママとコドモたち》が雑誌に掲載されている。



松江高校の友人と。後列右が一高

2 無国籍地

父の希望通り、法律の道へ進んだ奈良原だったが、実家が奈良へ移ると、飛鳥園主・小川晴暘のもとで奈良の仏像を見て歩くようになる。ある夏の日に、法隆寺金堂の釈迦三尊像と激しく出会い、美に開眼していく。そして、法学の道から美術へと転向する決意を固め、早稲田大学大学院に進学した。1954年、奈良原22歳の春である。



《無国籍地》1954年 島根県立美術館蔵

やがて、伝統的な美術史ではなく、世界でまさに立ち上がりつつある前衛芸術へとめり込んでいった。まだまだ評価されていなかった画家・河原温の《浴室》シリーズを、自らの審美眼を試すために月賦で買った。それは現在、東京国立近代美術館の収蔵品となり、奈良原の鑑識眼は証明された。1955年に結成された「制作者懇談会」に河原温とともに加わり、顰囁・池田満寿夫・堀内康司・真鍋博が結成した反画壇を掲げる「グループ」実在者「」にオブザーバーとして参加した。この時期、生涯の友となる前衛作家たちに出会っていく。

1954年春は、奈良原にとって重要な契機をいくつももたらしている。このとき、大阪城の天守閣にのぼった奈良原は、眼下に広がる広大な廃墟に惹かれ、足を踏み入れる。アジア最大の軍需工場といわれた大阪砲兵工廠の跡地である。その廃墟は、鋭い興奮とともに、どこか心安らぐ感覚を奈良原にもたらした。東京でも王子の軍需工場跡の廃墟をさまよい、写真を撮っていた。そして「無国籍地」と名付ける作品群を生み出していく。戦争の焼け跡は慣れ親しんだ原風景であり、軍需工場は学徒動員で旋盤工として働いた場であった。暗い青春の鎮魂歌として奈良原は多くを語ることがなかった。廃墟に差し込む光の織りなす造形を追い、前衛芸術のなかで培った美意識を発露させ



《無国籍地》1954年 島根県立美術館蔵

ていった。自らの心のなかを誠実にみつめ、思索を巡らしながら紡ぎ出した作品群は、以後「文明の光景」を捉えていくこととなる奈良原の「文明の破壊」という出発点となった。



左から真鍋博、堀内康司、池田満寿夫 撮影：奈良原一高

3 人間の土地

1954年には、もうひとつの重要な出会いがあった。九州に生まれたのに九州を知らないとい巡旅行をしていくなかで、長崎沖の炭鉱の島、端島、通称・軍艦島と、火山灰に埋もれる桜島の黒神村に出会った。

日本最深の炭鉱をもつ端島は、強固な岩壁^{ベトン}で囲まれた小さな島に、4800人が暮らす日本一の人口密度を誇る高層アパート群が林立し、軍艦のように見えた。一方、黒神村は火山灰に覆われ作物も育たず、簡易水道も地面の隆起で割れてしまう。ふたつの島では海によって隔絶さ



《浴場 緑なき島-軍艦島(人間の土地)より》
1954-57年 島根県立美術館蔵

れ、船の往来のみで生活物資を運ぶ不自由な生活なのか、人々は誇り高く逞しく生きている。その姿に深い感銘を受けた奈良原は、ふたつの土地を対比させることで、「生きる」ということを浮き彫りにする「人間の土地」を構想していく。戦争で受けた精神的な傷が長い間癒えることのなかった奈良原。「あの『人間の土地』の展覧会はいい作品をつくるためにつくったん

じゃ絶対ない。自分が生きるために、生きていくために撮ったんです」と言い切る。1956年5月、奈良原は初個展「人間の土地」を開催した。炭鉱という「社会機構対人間」、噴煙という「自然対人間」の二部構成により「生きる」ことの意味を問う。この明快なコンセプトをもった無名の学生の個展は、写真界を騒然とさせた。若い写真家たちは熱狂的に賛同し、重鎮たちは痛烈に罵倒した。その賛否両論の激しさとともに、日本の戦後写真のまさに幕開けとなったのである。

「人間の土地」の展示を手伝ったのは、「グループ」実在者」の面々であった。グループ展の後、各自の個展である「連鎖展」が開催され、奈良原の「人間の土地」展はその連鎖展のひとつのように見守られ、皆が展示を手伝ったのである。また、「制作者懇談会」のなかで、「人間の土地」についての論考を発表し討議されている。「人間の土地」展が、前衛美術の流れのなから生まれたことは重要である。



《岩壁(ベトン) 緑なき島-軍艦島(人間の土地)より》
1954-57年 島根県立美術館蔵



《地下道(トンネル) 緑なき島-軍艦島(人間の土地)より》
1954-57年 島根県立美術館蔵

4 王国

1958年、奈良原は二度目の個展「王国」を開催する。ふたつの世界を対比させる二部構成は、「人間の土地」から継承している。北海道函館近郊・当別にあるトラピスト男子修道院を舞台とする「沈黙の園」と、和歌山県女子刑務所に取材した「壁の中」。自ら求めて祈りの日々を送る修道士の世界と、罪を犯して強制的に収監された女囚の世界。前作「人間の土地」では、海によって物理的に隔絶されたふたつの島を対比させたが、今度は精神的に隔絶され壁に閉ざされたふたつの

極限状況を捉えた。「人間の土地」展を境に、意図せず写真家とみなされた奈良原は、自らをアウトサイダーのように感じていた。そして、自分よりさらにアウトサイダーだと思えたこの二つの世界に飛び込んでみたいと考えたのである。

修道院生活では、世俗を離れて神への奉仕に自らを献げ、自他の救済のために働く。石の壁によって囲まれ、一般社会とは交渉を絶った「祈れ・働け」^{オラ・エトラボラ}の生活である。沈黙の規則があり、言葉を発することはできず、意志の疎通は手まねを用いる。農耕・牧畜などの労働にも従事する自給自足の生活であり、そこには終始祈りがある。

女子刑務所は、高い壁に囲まれ、冷やかなセメントの廊下が放射線状に延びる。鉄格子の窓と監視の覗く小窓が続く。サイレンの響きとともに規則正しく就業・食事などの日課をこなす。女囚たちは、時間があれば鏡の前で、うちわの浚を口紅代わりにして粧うことに熱心である。出所後の自立の道を模索して、美容院などの職業訓練もなされた。

「王国」は、アルベール・カミュの「追放と王国」の一節を冒頭に掲げている。「人間の土地」では、タイトルは単なる表題ではなく、主題としての意味をもっている。と奈良原は記している。それは、生きることへの賛歌であるサン・テグジュペリの同名の小説「人間の土地」へのオマージュでもあった。奈良原は、この人間の尊厳を讀めるフランス理想主義の清涼な世界から出発して、第二次大戦の惨禍を経て、理想だけでは説明できない不条理を抱えたカミュの実存主義へと進んでいったといえよう。「王国」で、奈良原は日本写真批判



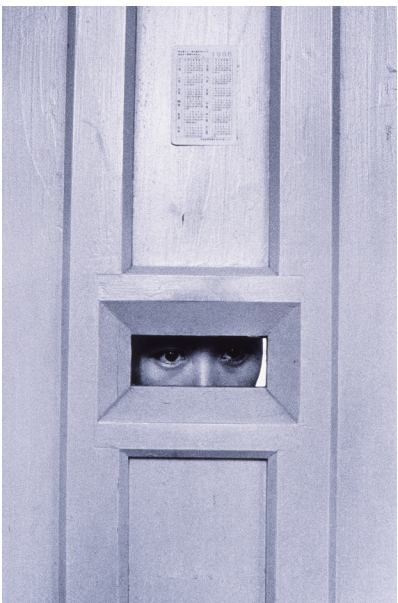
《夜の溶岩 火の山の麓-黒神村(人間の土地)より》
1954-57年 島根県立美術館蔵



《破れた野良着 火の山の麓-黒神村(人間の土地)より》
1954-57年 島根県立美術館蔵

しかし、この個展を区切りに、奈良原は写真の世界へ一挙に呑み込まれていくことになる。「人間の土地」展は、狼煙のように若い写真家たちを集結させた。評論家・福島辰夫は、「ぼくはいままでにあんなに時代のいぶきを全身に受けて、いきづいてる写真を見たことがなかったからである」とその感銘を記している。そして、福島を中心に10人の新鋭写真家による「10人の眼」展が開催されていく。

やがて、そのなから6人の写真家たちにより「VIVO」^{ヴィヴオ}が結成されていく。細江英公、東松照明、佐藤明、川田喜久治、丹野章、そして奈良原一高の6人になる「VIVO」の写真家たちは、戦後の写真表現を塗り替えていく。エスペラント語で生命を意味する「VIVO」は、写真のセルフ・エージェントであり、マネージャーを設け、撮影料を設定し、休日もつくり、写真家の社会的地位を確立する企てだった。



《壁の中(王国)より》 1958年 島根県立美術館蔵



《壁の中(王国)より》 1958年 島根県立美術館蔵

評家協会新人賞を受賞する。

「無国籍土地」「人間の土地」「王国」という50年代の三部作によって、奈良原は独自の作品世界を創り上げていった。それらは、自らの心と誠実に向き合い、練り上げていったコンセプトであるゆえに、一貫性をもっている。ひとつひとつ独立した作品でありながら、交響楽の前奏曲、第1楽章、第2楽章のように、互いに響き合う作品群としても構想されていたのである。



《バヤ コン ディオス 〈スペイン・偉大なる午後〉より》1963-1964年 個人蔵



《偉大なる午後 〈スペイン・偉大なる午後〉より》
1963-1964年 個人蔵

ヨーロッパのなかでも、スペインは奈良原にとって特別な存在だった。奈良原が幼年期を過ごした長崎の南蛮文化は、スペインやポルトガルを源流としていた。奈良原はスペインでふた夏を過ごし、闘牛を170回も見るとほど熱中した。中世の伊達ぶりを示す闘牛士、ライオンや豹に比される猛獣・闘牛。ムレタの布さばきで舞を舞うように対決する闘牛士と、馬より早く突進する闘牛。生と死が交錯し「生の衝撃」を漲らせる。そして、闘牛場に集う観客の熱狂的な反応がそれを取り巻く。

とりわけ、奈良原を魅了したのは、優れた闘牛士エル・ヴィティがある試合で牛の角にムレタを奪われてしまった時のことだ。素手になったエル・ヴィティが、次の瞬間牛の角に刺されることを予測して観衆はどよめいた。しかし、彼は牛を沈めるといわれる額にふっと素手をあてて牛の動きを封じ、静かにムレタを拾い、そのまま試合を続けたのだった。このエル・ヴィティの所作はまるで日本の古武士のようであり、素晴らしい瞬間に立ち会えて、奈良原はさらに闘牛の魅力に夢中になっていった。

また、ヘミングウェイの『日はまた昇る』にも活写された、スペインのパンプロナの祭りは、牛舎から闘牛場に牛の群れと人々の群れがなだれ込む「牛追い」に始まる。1週間、歌い飲み踊り、赤いスカarfを首に巻けば誰でも参加できる。長崎での祝祭の日々の高揚を彷彿とさせるこの祭りに、奈良原は溶け込みながら撮影していく。

フランコ政権下であったスペインの村々には、貧しい民衆たちの素朴な暮らしがあった。青い空と白い

壁、歌声が響き渡る美しいアンダルシア。岩山の洞窟に住居をつくり、その穴居に住むグラナダの人々。それは村の原形を思わせた。貧しいなかでも、元気に遊ぶ子供たち、逞しい民衆たち。ここにも奈良原の慈しみの眼差しがある。

帰国後、奈良原は、写真集『スペイン・偉大なる午後』を上梓した。『偉大なる午後』、『フィエスタ』、『バヤコンディオス』という「闘牛」「祭」「村」を主題とした三章で構成している。「バヤコンディオス」とは「ごきげんよう」を意味する古い挨拶である。スペインは、民衆の生きる力に満ちていた。



《フィエスタ 〈スペイン・偉大なる午後〉より》1963-1964年 個人蔵



スペイン・偉大なる午後



《樹 Paris 〈ヨーロッパ・静止した時間〉より》
1965年 島根県立美術館蔵



《秘密 Venezia:Italy 〈ヨーロッパ・静止した時間〉より》
1965年 島根県立美術館蔵



《化石 Pompei:Italy 〈ヨーロッパ・静止した時間〉より》1965年 島根県立美術館蔵

時間」と呼んで思索していく。旧約聖書のコヘレトの言葉、「天が下のすべての事には季節があり／すべてのわざには時がある／生まるるに時あり／死ぬるに時あり」に始まる美しく深い「時の詩」を反芻する。そして、写真の時間もまた「静止した時間」である。飛翔する鳩の影が石畳に落ちた時、一瞬時が止まったように感じた。この「静止した時間」をヨーロッパで採集していった。

帰国後、初めての写真集『ヨーロッパ・静止した時間』を、杉浦康平のデザインで創り上げる。この美しい写真集で奈良原は、日本写真批評家協会作家賞、芸術選奨文部大臣賞、毎日芸術賞を受けることとなった。『ヨーロッパ』についての私語」と称し、詩を編み詩集をつくるように写真を編み上げた、写真集の傑作である。



《塔 Ile-de-France 〈ヨーロッパ・静止した時間〉より》1963年 島根県立美術館蔵

7 ジャパネスク

1965年5月、奈良原は帰国した。3年間ヨーロッパに滞在した後の、5年間の日本滞在といえるほど、矢継ぎ早に仕事をこなし、再びアメリカに向かうこととなる。

この日本での5年間で、ヨーロッパ滞在の成果を纏めた写真集『ヨーロッパ・静止した時間』と『スペイン・偉大なる午後』を刊行するとともに、新たなシリーズ

を生み出した。フランス、スペイン、イタリア、オランダなどヨーロッパの国々を見てきた眼差しで、あたかも異邦人のように日本を捉えた写真集『ジャパネスク』を刊行したのである。日本は近くて遙かな国であり、「鏡の中に映った自分の姿に決して触れることが出来ない理に似ている」と奈良原は感じた。

ヨーロッパでの生活は、日本人としての自分をあら

ためて意識させるものだった。信仰している宗教は何かと聞かれ、改めて信仰について考えさせられることが多く、「禅」の世界に取り組んだ。パリで

見た春画の湿度のある色彩に惹かれ、日本の「色」に挑戦した。日本映画「切腹」がパリで上映されると、自ら腹を切るこの意味が解せないという質問攻めにあい、武士の象徴である「刀」という存在を考察した。さらに、「富士」「能」「角力」「連」「封」と、日本の伝統文化の典型を、異邦人の眼差しを思わせる新鮮な感覚で捉え直したのである。

この時期、ファッションやコマーシャルなどの仕事も精力的にこなしている。デザインを勝井三雄、衣装は森英恵、写真が奈良原一高という顔ぶれで制作した富士紡カレンダーは、1965年文部大臣賞、1967年通産大臣賞を受賞した。

奈良原は60年代の三部作といえる『ヨーロッパ・静止した時間』、『スペイン・偉大なる午後』、『ジャパネスク』を纏め、1970年4月、次の目標とさだめていたアメリカへと旅立った。



《禅 振鈴(神奈川県鶴見)〈ジャパネスク〉より》1969年 島根県立美術館蔵



《色〈ジャパネスク〉より》1968年 島根県立美術館蔵



《富士 山梨県河口湖畔〈ジャパネスク〉より》1969年 島根県立美術館蔵



《鳥 1-2月〈富士紡績カレンダー 1967〉より》
デザイン:勝井三雄 撮影:奈良原一高 衣装:森英恵
1966年 島根県立美術館蔵

8 消滅した時間

ヨーロッパから帰国する途中に、奈良原はニューヨーク博覧会を見るため、アメリカに立ち寄っている。そのとき、河原温がニューヨークにアトリエ兼住居である広いロフトを構え制作しているのを見て、今度はアメリカに滞在し自分のロフトを持つと決めた。1970年に渡米して、半年間は古い靴工場を改築してロフト造りに専念し、これまでの写真を再びゼロにするため写真を撮らず、アメリカの新鋭の写真家・ダイアン・アーバスのワークショップに参加した。

奈良原がアメリカに滞在した時期は、写真の価値観が大きく変わる転換期にあった。『ライフ』『ルック』などのグラフ・ジャーナリズム全盛だった時代は過ぎ去ろうとしていた。写真のプリントは単に印刷して大量に流布する印刷原稿ではなく、それ自体が作品であると再認識されていた。写真専門のギャラリーが開設され、美術館や愛好家のコレクションとして、作家自らが焼いたプリントが収蔵され鑑賞される時代へと移ろうとしていた。奈良原は、永久保存に耐える完璧なアーカイヴァル処理によるプリント技術を学ぶ。また1973年、個展「IKKO NARAHARA」が、ジョージ・イーストマンハウス国際写真美術館をはじめとして開催され、その後、ニューヨーク近代美術館、ボストン美術館などに作品が収蔵されていた。奈良原の国際的な評価はこの時期定まった。



《二つのゴミ罐-ニュー・メキシコ、1972 〈消滅した時間〉より》1972年 島根県立美術館蔵



《レイク・パウエルの水路 〈消滅した時間〉より》1971年 島根県立美術館蔵

奈良原は、アメリカ滞在中、ニューヨークを拠点としながら、横断2回、縦断1回の撮影旅行を敢行した。1971年夏の第1回アメリカ大陸横断では、旧ルート66をグレイハウンド・バスとレンタカーで往復し、グランド・キャニオン、モニュメンタル・パ

レー、パウエル湖などを撮影した。第2回大陸横断は、ニューヨークを1972年6月に出発して10月までの4カ月に及ぶ長い旅だった。青いシボレーのステーション・ワゴンを自ら走らせ、キャンプをしながら旧ルート66を往復した。

アメリカ大陸を横断していると、砂漠の真ん中に、100トンの巨大な隕石が落ちたクレイターが現れる。また、太古の森が石となった化石の森や、断崖に埋もれた1億3000万年前の夥しい恐竜の骨が出現する。まるで、車がタイムマシンになったような気がした。ここは地球という星なのだという思いをあらためて抱く。夜になると、森の木々のざわめきに、アメリカ先住民たちの「偉大なる精霊」の存在を感じた。メビウスの輪のように、現代と太古を、宇宙と精霊をつないでいる。この「宇宙に一番近い国」で、アポロ17号打ち上げを見た。すると、地球上の何気ない世界が一層たまらなく愛しく思えてきた。

1975年、奈良原はアメリカでの成果を写真集『消滅した時間』に纏めた。



《アポロ17号 〈消滅した時間〉より》
1972年 島根県立美術館蔵

1964年、奈良原一高は初めてヴェネツィアを訪れ、その美しさに魅了された。9年後の1973年、アメリカ滞在中に奈良原はこの街を再訪した。茫漠と広がるアメリカとは対照的な、すべてがヒューマン・スケールのヴェネツィアに再び惹きつけられていった。

とりわけサン・マルコ広場の美しさに心奪われた。夜が訪れると、125の回廊の日除けカーテンが上がり灯がともる。球体の灯と、その光を受けたカーテンの襞の抑揚が、翼が羽ばたくように美しい。1978年には3度ヴェネツィアに通

い、この125の回廊の灯すべての撮影を敢行し、「光の回廊―サン・マルコ」を作り上げた。1979年に個展を開催し、1981年に世界一長い写真集を仕上げている。

奈良原は、その後も毎年のようにヴェネツィアを訪れている。ヴェネツィアは、5世紀にアッティラ率いるフン族の侵入により、海へと追われた民たちが、葦の生い茂る干潟へと逃れ、潟に杭を打ち込



《光の回廊-サン・マルコ》1979年 島根県立美術館蔵



《ダニエリホテルの前〈ヴェネツィアの光〉より》1973-1987年 島根県立美術館蔵

三方を壮麗な建物に囲まれ、海に向けて開いたサン・マルコ広場は、まさに空を天蓋とする劇場空間である。謝肉祭の期間、13世紀に仮面をつける風習が始まり、その後幾度か中断しながら1980年に復活する。仮装した人々が街に繰り出し、虚構空間をさまよう。奈良原は、夕闇のなか立ち現れる華麗で摩訶不思議な人々を写し撮っていた。奈良原のヴェネツィアとの22年の歴史の総決算である。

初個展「人間の土地」

を契機に、予期せず写真家の道を歩みだすことになった奈良原にとって、それが本当に自分の道なのだろうか、という迷いが常にあった。奈良原は、アメリカ滞在中にはじめて自分は写真家だと自覚した。帰国してから、奈良原は『王国』（1978）、『人間の土地』（1987）、『無国籍地』（2004）と初期の三部作を写真集の形にした。自らの写真家としての原点を改めて振り返る。それは、ヴェネツィア三部作に取り組んだ時期と重なる。奈良原はヴェネツィアに、かつて自分を取り巻いていた閉ざされた濃密な空間と安堵するような閉塞感を感じた。生と死が交錯し、その衝撃が闇に溶け込む空間へ、惹かれるままに自らを解放していった。

み住处とした。このアドリア海に浮かぶ島には、150を超える運河が縦横に走り、180に及ぶ島が浮かび、その島と島を結ぶ400もの橋が架かる。浮島のなかの小路は迷路のように伸びる。まさに迷宮都市である。

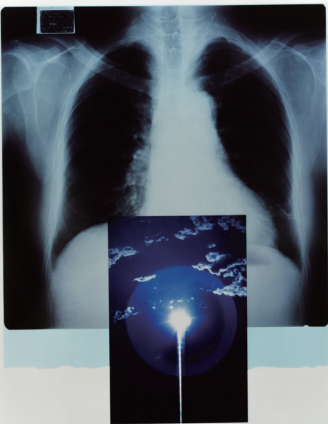
奈良原は、夜の闇に浮かび上がるこの海上都市に魅せられ、『ヴェネツィアの夜』（1985）を上梓した。サン・マルコ広場に広がる夜空の闇に稲妻の閃光が走る。底知れぬ暗さを秘めた水路をゴンドラの船が行き交い、光の軌跡を残す。黒い水の上に描き出されるその光跡は、しなやかに蛇行しながら、神秘的に輝く光の束を編み上げていく。水上の宴・レデントーレの祝祭の最後を飾る花火は、華麗なる闇の広がりのなか、光の乱舞を繰り広げる。ほとばしる光が拡散して海へと沈み、その煌めきが海上に映し出される。

この時期、奈良原の周りには、再び死の影が訪れていた。1978年には盟友・山岸章二が、1979年には敬愛する詩人・美術評論家の瀧口修造が亡くなる。そして1982年には母が旅立った。運河の水が血流のように流れるヴェネツィアの闇は、安堵感を湛えて、奈良原の心を包み込んでいった。

空

奈良原は、1988年にネフローゼ症候群のため、1990年には胸腺腫瘍手術のため入院している。重い病に罹った時、人は様々なことを考える。奈良原も同じである。しかし、奈良原が例外なのは、レントゲンを撮りながら「レントゲンも写真だ」と思い至ったことである。そして、自らのレントゲン写真を使った《太陽の肖像 復活》を制作し、後に写真集『空 Ⅱ』に纏められる《復活》シリーズに没頭していく。一番身近でありながら、自らの身体の内부는未知の世界であると発見したのだ。そして身体内部を映したレントゲン写真に魅せられていく。《復活》は、医師が撮影したレントゲンを使っているが、『インナー・フレーザー』は、あきらかに作品を創ろうと意図して、手でポーズをして、花と組み合わせ撮っている。奈良原の探究心は尽きることがない。

退院して街を歩きはじめると、スカイラインが頭の中で輪を描くように感じた。それを作品化した写真集『HEAVEN 天』は、奈良原がコンピューターを使い



《太陽の肖像(背腹方向胸部X線像)復活〈空〉より》1990年 島根県立美術館蔵



《聖マルコ広場の稲妻 テンペスト〈ヴェネツィアの夜〉より》1964-1985年 島根県立美術館蔵



《大運河 光跡〈ヴェネツィアの夜〉より》1964-1985年 島根県立美術館蔵



《レデントーレの祝祭の花火 祝祭〈ヴェネツィアの夜〉より》1964-1985年 島根県立美術館蔵



《The Tokyo Metropolitan Government Office, SHINJUKU Vertical Horizon - Tokyo 1991-1995〈天〉より》1991-1995年 島根県立美術館蔵

デジタル処理によって仕上げた最初の一冊となった。1985年に初代のマッキントッシュを入手し、アラジンの魔法のランプを手に入れたように感動した奈良原は、来たるべきデジタル時代を予測して、その技術を自らのものとしたのである。

法を司る父親の背中を見て育ち、自らも法律を学んでいたことは、奈良原の重要な資質を形成していると考えられる。客観的に人間の世界を見る、人間の文明の生成と破壊をみつめる。まるで神の眼差しのような巨視的な眼で見通す。法律の世界は、人間の行いを客観的に見て判断しなければならぬ。この強固な客観性をもつ巨視的な視点というのは、法律を学んだ奈良原独自のものだと思う。

そしてまた、その眼差しは冷ややかなものではなく、とても温かい。ふと神の眼が地上に降りてきて、少年の眼に変わり、キラキラと瞳を輝かせて微笑みかけるような眼差しである。この清らかで慈しみあふれる眼差しが、奈良原一高の写真をつくりあげているといえるのではないだろうか。戦争の時代を経て、生と死というものに常に対峙しながら真摯にみつめてきた文明の光景。奈良原の創り上げた世界は、これから多くの人々に愛され続けるであろう。

奈良原一高は、2020年1月19日、享年88歳で永眠した。